

馬場公彦著

世界史のなかの文化大革命

〈平凡社新書、二〇一八年九月、三三六頁〉

昨年春、『中国21』では文革特集を組んだ。「いまさら、いまなお、いまこそ」とやや道化したようなタイトルを付けた。いうまでもなく、現代中国に深く関わる「黒歴史」であり、それゆえ文革を過去のものとせず、いまでもそのトラウマに取り憑かれている現代中国への視座を獲得したいとの問題意識からであった。そこには世界的「変動」のあった一九六八年というタイムスケールも埋め込まれていた。一九六八年が「変革」を求めていたことは確かだと信じていたが、結果的に「変動」あるいは動揺を与えたに過ぎなかったこともまた事実であろう。

本書はグローバル・ヒストリーとして文革を描こうとしている。「」所に起こった事件が各地に影響し、構造的変化を生んでいくことがグローバル・

ヒストリーであるなら、一九世紀のパリに起こった七月革命、二月革命はまさしくそのとおりであった。二〇世紀に入ると、その傾向は激しくなりこそすれ、緩和されることはなかった。システム論ですでに提示されたとおり、グローバル化の進展である。

著者は、文革の「亡霊」の現象として「消えたと思えば現れる」「頭と尻尾がはつきりしない」「社会集団に憑依して制御不能の状態に陥れる」をあげ、そうした現象がすでに阿Qに現れていたことを指摘する（一二―一三頁）。したがって、文革が「中国という特殊な空間、特殊な歴史条件の下で起こった一度きりの出来事なのだろうか」という問題設定（一五頁）は、当初から否定的な回答が用意されているわけである。そうした文革を、筆者は「外から鳥の目で俯瞰して眺める」。文革を、中国を舞台とした完結したものとして描くのではなく、二〇世紀後半のナショナリズムの輝ける旗手であったインドネシアから筆を起こすのであ

る。バンドン会議であり「九三〇」である。それが容易に国境を越え、六〇年代にいたって孤立を深めたと感じた毛沢東が文革を発動する。毛沢東による「紅衛兵の劇場効果」（一五三頁）はまたたく間に全国に広がり、中国は混乱の極にまで到る。そして、「一九六八年の変革」の波動によって世界中に拡散する。パリの五月革命しかり、西カリマンタンの華人武装蜂起（第七・八章）も例外ではなかった。日本では、「日共山口左派」（第九章）の残り火も、現在もお灯っている。「革命の亡霊」は、まだ過ぎ去っていないのである」（終章）。

中国を見てみれば、習近平政権成立に到る薄熙来との権力抗争、薄熙来の「唱紅運動」、習近平による「点撃老虎和蒼蠅」（虎もハエも叩く）、いずれもファッショ的な香りが紛々と漂っているのではないだろうか。（三好章）